



表す
感じる

かほく防災記者リポート



「命を守る行動」胸に刻む

「311『伝える／備える』次世代塾」で気仙沼視察



杉ノ下遺族会慰霊碑の近くで三浦祝子さんの話を聞いた。奥は気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館=10月12日

東日本大震災の教訓や災害への備えを学び、発信するかほく防災記者の中学・高校生4人が10月12日、大学生らを対象に河北新報社などが開く通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」の気仙沼市の被災地視察に参加した。震災遺構・伝承館と杉ノ下遺族会慰霊碑を訪れ、津波による被害と犠牲について学んだ。

生徒らは伝承館のホールで、気仙沼市中心市街地に流れ込む津波や津波火災の映像を視聴。震災遺構の気仙沼向洋高の旧校舎を回り、津波で流された車が残る3階や、冷凍工場がぶつかって壊れた4階の壁を見学し、地域を襲った津波の高さと威力を学んだ。

杉ノ下地区では「けせんぬま震災伝承ネットワーク」の語り部の近藤公人さん(77)、三浦秋男さん(77)、三浦祝子さん(79)に話を聞いた。

地区には85世帯約310人が暮らしていたが、震災では約13戸の津波に襲われ、全戸が流された。慰霊碑には犠牲になった住民93人の名前が刻まれている。震災後、住民の要望で海拔19mの避難タワーが整備された。

一带は1896年の明治三陸大津波で浸水しなかったという。震災前は市の避難場所に指定されていた。

避難場所近くに住んでいた三浦祝子さんは、津波で夫の正三さん(当時67)を亡くした。

「ここなら大丈夫という安心感が、多くの人が命を亡くした原因だと思う。自然の猛威の前に人間はどうすることもできない」と心の片隅に置いてほしいと呼びかけた。

被災者の体験 自分事に

震災遺構の旧校舎に残されていた、津波被害の跡のすさまじさに鳥肌がたった。けせんぬま震災伝承ネットワークの皆さんとの体験を自分事と捉え、「今は震災後ではなく次の災害の前だ。風化させず未来の犠牲を防ぎたい」との思いも受け止め、今後に備えたい。

(大河原産業高1年 鈴木慎人さん 15歳)



津波の恐ろしさ再認識

被災者から当時の心情を聞いたり、津波で屋根が流された旧校舎の体育館を見たりして、津波の恐ろしさを再認識した。特に印象に残ったのは教科書がちらばり、作業服がロッカーに入ったままの教室。津波で日常生活が全て奪われたと思うと、胸が痛くなった。

(仙台三高2年 阿部真聖さん 17歳)



防災意識し生活したい

震災遺構は、被災当時の校舎や教室内の状態がそのまま保存されている。自然の力によるむごいまでの被害が目に見え、過去の起った大災害を体験するよくな感覚に襲われた。人々が再び被害を体験することがないように、防災を生活に根付かせたい。

(仙台市五橋中3年 山口岳人さん 14歳)



率先避難の大事さ知る

震災遺構は旧校舎の3階に流された車、4階には冷凍工場がぶつかった跡があり、津波の恐ろしさを次世代に伝える強いメッセージを感じた。震災直後、内陸の高台に避難する生徒たちを見て、避難を始めた住民がいたということ、率先避難の大事さも分かった。

(仙台市七北田中2年 高橋彩葵さん 14歳)

